

NEWS

SEIJI TOGO MEMORIAL
SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART

左) フィンセント・ファン・ゴッホ

《ひまわり》1888年

損保ジャパン東郷青児美術館

中) フィンセント・ファン・ゴッホ

《ルーラン夫人(揺り籠を揺する女)》1889年

シカゴ美術館

The Art Institute of Chicago, Helen Birch Bartlett Memorial Collection, 1926. 200

右) フィンセント・ファン・ゴッホ

《ひまわり》1889年

アムステルダム・ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)

Van Gogh Museum Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



ゴッホと花

ゴッホと同時代の画家たち

ひまわりをめぐる

VAN GOGH
Van Gogh and His Contemporaries

AND
With Special Focus on His 'Sunflowers'
FLOWERS

9月20日(土)~12月14日(日)



図1)
東郷青児
《コントラバスを弾く》
1915年
油彩
153.0×75.4cm



図2)
東郷青児
《ピエロ》
1926年
油彩
90.8×63.4cm



図3)
東郷青児
《レダ》
1968年
油彩
144.7×97.0cm



図4)
東郷青児
《つまくれ》
1960年
水彩素描
47.0×31.0cm

損保ジャパン東郷青児美術館 所蔵作品展

優雅で甘美な女性像のモチーフが持ち前の東郷青児が、画業当初からこうした作風で描いていたのではなく、日本の画家の中でも西洋の前衛美術をいち早く吸収し、これを土台として自己のスタイルを確立していったことは、すでに広く知られています。今回の所蔵作品展では、そうした東郷青児の初期から晩年までの油彩画を中心に展示し、作風の展開をたどっていきます。

1897(明治30)年に鹿児島で生まれ、東京で育った東郷青児は、ドイツ留学から帰国して間もない作曲家山田耕柊から西洋の新たな美術動向を学びます。そして山田の勧めで1915(大正4)年9月に日比谷美術館で初の個展を開催しました。その出品作約20点の中の《コントラバスを弾く》(図1)は、コントラバス奏者で山田を紹介してくれた原田潤がモデルです。対象を解体した大胆な構図による青児の作風は、当時、新聞・雑誌で日本初のキュビズム・未来派と評されました。この個展をきっかけに知り合った二科会の創設者有島生馬によって、翌年の二科展出品を勧められ、初の出品作《バラソルさせる女》で二科賞を受賞し、画壇デビューをかざります。

その後青児は、1921(大正10)年24歳でフランスに渡り、7年間の留学中にイタリア未来派の運動に参加しましたが、理論優位の美術運動に幻滅します。またピカソと出会い、その芸術

に心酔しますが、ピカソの独創性に富んだ才能を目の当たりにして、人まねではない、画家としての個性の重要性に気づきはじめます。《ピエロ》(図2)は、ピカソの「新古典主義」と呼ばれる時期の量感のある堂々とした人体表現の影響を受けながらも、個性的表現への模索の苦悩の中で描かれた作品です。またルーヴル美術館でラファエロ、アングル等巨匠の古典的絵画からも力を得た彼は、帰国後、独自の女性像を生み出す画家へと大きく変貌していきます。

青児は第2次大戦後、二科会を再建し、そのリーダーとして君臨しながら、旺盛な創作活動の中で、油彩において甘美な叙情性と洗練された都会的感覚に溢れる独自の様式による女性像、いわゆる「東郷式美人画」を展開していきます。それは「だれにでも親しまれ、しかも通俗ではなく高いものをもち常に時代の先端を行くことを目指した青児の一つの帰結でもありました。《レダ》(図3)は、そうした東郷様式の円熟期を示す作品の一つです。ギリシャ神話の挿話で、西洋の伝統的な画題でもあった「レダと白鳥」にテーマを借りたこの作品では、対角線上の動きのある裸体像と、その背景の白鳥と植物のリズミカルな構図に、キュビズムや未来派的な技法を装飾的に再活用した晩年独特の作風が見られます。

青児はまた数多くの素描を残しています。油彩画の直接的な下絵ばかりでなく、独立した作

品としての素描を描きました。例えば《つまくれ》(図4)のように、その多くは女性の頭部ないし半身像で、鉛筆に淡い水彩がほどこされています。大きな目、高く通った鼻筋、細長い首等、油彩画にも見られる様式的特徴が備わっており、モデルの個性よりも画家の中の女性像が色濃く投影されています。しかし、即興的な作風の中に、様式化を極限にまで進めた油彩画にはない素描ならではの画家の素直な美的感覚を汲み取ることができるでしょう。

今回の所蔵作品展では、所蔵作品の柱のひとつであるアメリカ素朴派の画家グランマ・モーゼスの作品も展示します。モーゼスは一生を農場として過ごしましたが、70歳代で油彩画を描きはじめ、1961年101歳で亡くなるまで1600点にも及ぶ作品を残しました。農場での簡素な日常や年中行事、身近な四季折々の風景をテーマに繰り返し描き、現在でもアメリカ国民に広く親しまれている画家です。2001～2002年ワシントン国立女性美術館を皮切りにアメリカで巡回した「21世紀のグランマ・モーゼス展」に当館からも6点出品しました。なじみのある景色を思い起こしながら俯瞰図的に構成したモーゼスの風景画には、人の心をなごませる不思議な魅力があります。当館では、風景画を中心に刺繍2点と油彩画31点、日本国内では最も多くを所蔵しています。

2003年7月17日(木)—9月10日(水) 特別展 ルノー・コレクション フランス現代美術展

フランスの自動車メーカーであるルノー社が、1966年から1985年にかけて収集したフランスを中心とした現代美術を展示。アルマン、デュビュッフェ、ヴァザリ、ミショーなどを含む13作家による約140点を紹介。

◆月曜日休館(但し、7月21日は開館) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

◆入館料：一般1000円(800円)／大・高生600円(500円)、()内は前売および20名以上の団体料金／シルバー(65歳以上)800円／中・小生無料

2003年9月20日(土)—12月14日(日) 特別展 ゴッホと同時代の画家たち ゴッホと花 ‘ひまわり’をめぐって—

ゴッホ美術館とシカゴ美術館の協力でゴッホが夢見た《ルーラン夫人(揺り籠を揺する女)》を中央に、2点の《ひまわり》で左右を飾る「三幅対」の展示を実現。ゴッホと同時代の画家による「花」をモチーフにした作品約40点を紹介しながら、《ひまわり》に込められたゴッホの意図を探ります。

◆月曜日休館(但し、10月13日、11月3日、11月24日は開館) 午前10時～午後6時(金曜日は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで

◆入館料：一般1000円(800円)、大・高生600円(500円)、()内は前売および20名以上の団体料金／シルバー(65歳以上)800円／中・小生無料

◆10月1日(水)は「お客様感謝デー」として無料開館いたします。

2003年12月20日(土)—2004年1月17日(土) 所蔵作品展

損保ジャパン東郷青児美術館のコレクションの中から、その核である東郷青児の作品を中心に一堂に展示。

◆月曜日休館(但し、1月12日は開館)、年末年始休館(12月27日～1月5日) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

◆入館料：一般500円(400円)／大・高生300円(200円)、()内は20名以上の団体料金／中・小生無料

2004年1月24日(土)—3月3日(水) 未来を担う美術家たち「DOMANI・明日」展 2004

〈文化庁芸術家在外研修(新進芸術家海外留学制度)の成果〉

文化庁が実施している若手芸術家の海外研修の成果を発表。今回は日本画部門の平成7～11年度研修修了者の中から9名の作品を紹介します。

◆月曜休館 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

◆入館料：一般500円(400円)／大・高生300円(200円)、()内は20名以上の団体料金／中・小生無料

2004年3月17日(水)—4月23日(金) 第23回損保ジャパン美術財団選抜奨励展

2002年9月から2003年8月までの各美術団体展の絵画部門における「損保ジャパン美術財団奨励賞」受賞作と、全国の推薦委員によって推薦された絵画作品を展示。あわせて団体彫刻部門の奨励賞受賞者の新作を紹介します。

◆月曜休館 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで

◆入館料：一般500円(400円)／大・高生300円(200円)、()内は20名以上の団体料金／中・小生無料

TOPICS

「ルノー・コレクション：フランス現代美術展」記念シンポジウム報告

「フランス現代美術展」開催を記念して、フランス現代美術研究の第一人者によるシンポジウムが7月19日(土)に損保ジャパン本社ビル2階大会議室で開催された。先ずルノー・コレクションのアン・ヒンドリー学芸員により「ルノー・コレクション」、ソルボンヌ大学イザック・ゴルトベルク教授により「キネティック・アート」について講演を頂いた。休憩の後、ブザンソン美術館クレール・ストゥリグ館長により「アンリ・ミショー」、トゥール大学エリック・ド・シャセイ教授により「ヴィクトル・ヴァザリ」、最後にアン・ヒンドリー学芸員により「ジャン・デュビュッフェ」について講演を頂いた。

ヒンドリー学芸員より、300点におよぶルノー・コレクションの性格は、体系的に収集されたものではなく、ある傾向があること。つまり、大きな作品群であるヴァザリ、ミショー、デュビュッ

フェ、エロや、少ない点数でありながら重要な作品群であるアルマン、ティンゲリー、マッタ、そしてアレシンスキー、ミロ、タビエス、ニキ・ド・サン＝ファールなどの独立した作品群で構成されていること。これらが芸術界と産業界との理想的な出会いを目指して、作家たちとルノーの技術者たちとのコラボレーションによって制作されていった歴史について話された。

ゴルトベルク教授は、1955年のドニーズ・ルネ画廊の「動き」展とヴァザリの「黄色の宣言」を契機として始まったキネティック・アートとオブ・アート

の共通点と相違点を説明した。また、ドガの《オペラ座の稽古場》には踊り子の運動が示唆され、モネの《グルスイエール》ではタッチと色彩の分解で動きが表され、ターナーの作品にダイナミックな気象現象が表現され、デュシャンの「階段を降りる裸体」、マイブリッジとマレーの連続写真、イタリア未来派バッラなどに動きを

表現するキネティック・アートに相当する先駆的役割を見つけ、ヴァザリの光学効果にわたる説明をした。

ストゥリグ館長は「アンリ・ミショー、形象化と非形象化とはざま」というテーマで講演を行い、フランスの戦後

の10大文学作家の一人に数えられるミショーがクレール、エルンスト、デ・キリコと出会いその衝撃で絵画を描くようになった経緯を説明、エクリチュール(言語)と絵画との間で揺れ動いた生涯、メスカリンという麻薬の影響に触れた。

ド・シャセイ教授はヴァザリの再評価の必要性を唱え、「ダンフェール」時代、「ゴールド」時代、「ベリール」時代の分けや、幾何学的抽象化の方法論、普遍的な現象への移行、彼の環境造形例などを述べ、またヴァザリ没後の彼の影響についても言及した。

ヒンドリー学芸員がデュビュッフェの赤、青、黒の3つの色彩のウルループ作品によって環境彫刻制作の可能性がでてきたことの説明とその作例紹介、そして《青い壁》の制作経緯の説明を行った。





ゴッホと花

ゴッホと同時代の画家たち | ひまわりをめぐる

VAN GOGH
Van Gogh and His Contemporaries
A N D
With Special Focus on His 'Sunflowers'
FLOWERS

9月20日(土)～12月14日(日)

1)

1888年8月、南フランスのアルで画家仲間たちとの共同生活を夢見ていたフィンセント・ファン・ゴッホ(1853年～1890年)は、共同生活の為に借りていた「黄色い家」を飾るために、大きな壺にいくつかのひまわりの花束を描いた。これが、ファン・ゴッホの代表作《ひまわり》である。

ファン・ゴッホ全作品目録の編集者、ヤン・ブルスカが「ファン・ゴッホを連想する唯一の」と述べたこの「ひまわり」は、アルル以前のパリ滞在中に、すでに描かれていた。しかし、この花が事実上、ファン・ゴッホのものとなるのは、アルルで再度このテーマに取り組むようになってからだ。フィンセントは「黄色い家」のアトリエ、中でも敬愛する画家ポール・ゴーギャンの部屋を飾るために《ひまわり》の制作に励む。共

同生活の夢は、結局ゴーギャンとの決別と共に消えてしまうが、ファン・ゴッホは、《ひまわり》を自作の《ルーラン夫人(揺り籠を揺する女)》と組み合わせ、やがて《ルーラン夫人(揺り籠を揺する女)》を中央に2点の《ひまわり》を左右に並べるという、「三幅対」の計画を抱くようになる。

展覧会「ゴッホと花」では、ファン・ゴッホと同時代の画家による「花」をモチーフにした作品、約40点を展示し、彼らの「花」に対する関心、特に静物画から装飾画、そして「三幅対」の一端を担うことになった、「ひまわり」に込められたフィンセントの意図を探る。また本展覧会では、2点の《ひまわり》と《ルーラン夫人(揺り籠を揺する女)》が、並べられ、ファン・ゴッホが夢見た「三幅対」として展示される。



弟テオ宛ての書簡の中に描かれたスケッチ (1889年5月22日付け)
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム
Van Gogh Museum Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

フィンセント・ファン・ゴッホの「三幅対」について

「三幅対」とは、もともとは礼拝用の三連祭壇画を意味する。一般的に中央にメインの作品を、そして両脇に翼と呼ばれるパネルを配する。ゴーギャンがアルルを去った後、ファン・ゴッホはゴーギャンの部屋を飾っていた2点の《ひまわり》を、そのころ取り組んでいた《ルーラン夫人》の肖像画と組み合わせて飾ることを思いつく。

初めは、全部で7～9点になる構成をイメージ、あるいは4点の《ひまわり》の間に2点の《ルーラン夫人》を並べるなど、様々な組み合わせを試みているが、最終的には、《ルーラン夫人》を中央に2点の《ひまわり》を左右に配置する案を、弟テオ宛ての手紙の中で述べている。

このテオに宛てた手紙によれば、こうして並べることで一組の「三幅対」が出来上がるだけでなく、色彩は輝きを増し、作品の本来の意味を理解することが出来る、とフィンセントは述べている。

ファン・ゴッホの「三幅対」の計画は、書簡の中に、スケッチと共に説明されているのみで、実現には至っていなかった。2001年、シカゴ美術館で開催された「ゴッホとゴーギャン:南のアトリエ展」の会場で、ファン・ゴッホの《ルーラン夫人(揺り籠を揺する女)》の両脇に2点の《ひまわり》が展示され、ファン・ゴッホが夢見た「三幅対」が実現した。今回の展覧会では、この「三幅対」が、日本では初めて再現される。



2)

1)
ジェームズ・T・ティ
《ひまわりのある格子越しのキリスト》
ニューヨーク・ブルックリン美術館
Brooklyn Museum of Art, Purchased by public subscription 00.159.11



3)

2)
フィンセント・ファン・ゴッホ
《グラジオラスとエノギクの花瓶》(1886年)
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



4)

3)
アドルフ・モンティセリ
《花の静物》(1875年頃)
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

4)
カミーユ・ピサロ
《芍薬と梅花空木のある静物》
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム
Van Gogh Museum Amsterdam

ギャラリートーク

学芸員が展示作品について解説します

【一般対象】

10月3日(金)、10月17日(金)

いずれも18:00より

10月31日(金)、11月7日(金)

いずれも13:00より

【小中学生と父母対象】

9月27日(土)、10月13日(月)

いずれも13:30より

★会期中、作品解説用に音声ガイドの貸し出し(有料)を行っております

NEWS

お問い合わせ先 03(5777)8600
ハローダイヤル

財団法人 損保ジャパン美術財団 損保ジャパン東郷青児美術館
160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン本社ビル42階
電話 03(3349)3081【代表】/ファックス 03(3349)3079
ホームページ = <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>
交通 = JR新宿駅西口、丸ノ内線新宿駅・西新宿駅、
大江戸線新宿西口駅より徒歩5分

損保ジャパン東郷青児美術館ニュース No.30

発行日 = 2003年8月22日
発行 = 財団法人損保ジャパン美術財団
損保ジャパン東郷青児美術館
製作 = 求龍堂 デザイン = 若林純子
印刷 = 凸版印刷株式会社

100
100周年記念事業として